

教務補助を通して学んだこと

佐藤 雅子

【キーワード】学習ストラテジー・自己モニター能力・サイレントウェイ・TPR・VTS

1. はじめに

以前、日本語教師として国内の専門学校に勤務していた際、発音の授業を担当したことがあった。当時の私は何をどう教えていいのかも分からず、単音・単語レベルのミニマルペアの聞き取りやリピート練習を毎行っていた。そのような単調な授業に対して、学習者も退屈そうであり、私自身もモヤモヤとしたものを抱えていた。

そんな過去の反省から、2002年秋学期に「音声教育実践研究」を履修した。実践研究の時間に発音の知識や教授法について先生や院生仲間と意見交換をし、その後「発音Aクラス」で実践を行った。毎回新しい発見が多く、自分の中でうまく消化できない点があった。もう一度この授業を体験し学んだことをしっかり身に付けたいと思い、次の学期から「発音Aクラス」の教務補助をすることになった。

2. 授業の流れと教務補助の内容

「発音Aクラス」の授業は『コミュニケーションのための発音レッスン』を用い、1コマ(90分)1課ずつ進めていく。はじめの30分は戸田先生がクラス全体に対し、学習課の動機付けと導入、聞き取り・聞き書きを行う。次の30分はクラスを2つのグループに分け、それぞれのグループに先生と教務補助が入り、学習項目の練習を行う。最後の30分は小さいグループ(主に母語別)に分かれ、実習生(大学院生)が練習した発音を実際の場面ではどのように使うか、ゲームやロールプレイを通して応用練習を行う。

教務補助の仕事内容は大きく授業前、授業中、授業後に分けられる。

授業前には先生と授業の進め方の打ち合わせを行い、授業に用いる補助教材の作成を行う。「発音A」は初級後半の学習者を対象としているため、日本語による複雑な説明はできない。そのため、視覚的な教材(絵カードや矢印カードなど)の準備が必要となる。どうすれば分かりやすく学習者に伝えることができるか、そして楽しく練習できるかをポイントに補助教材を作成した。

授業中は2グループに分かれた際の練習の担当と、実習生の応用練習の手助けを行う。2グループでの練習では、先生と教務補助で教え方に差が出ないようにすると同

時に、学習者の状況や質問にも柔軟に対応しなければならない。また、教室後方で実習生が見学しているので、はじめの頃はかなり緊張したが、しだいに慣れていった。

授業終了後は先生と授業の内省を行った。自分の行動を振り返り、それを他者（先生）に伝える作業を繰り返すうちに自分の教え方のくせや問題点、良い所を意識化することができた。これは私にとって小さなアクション・リサーチとなった。

3. 学んだこと

「発音 A クラス」の授業は聞き取りやリピートの基本的な練習だけでなく、サイレントウェイ、TPR、VTS 等の教授法も取り入れられて進められている。実習生として履修した際は、見学と実習で精一杯であったが、教務補助として入った際にはある程度の余裕を持って学習者の成長・変化の過程を見ることができた。

教師がモデル発音しなくても、学習者は try&error で自分の中で発音のルール作りをしたり、学習者同士のグループダイナミクスで協同学習を行ったりしていた。韓国出身の学習者・A さんは同じ韓国出身の学習者・B さんに、「B さんの動詞の発音は最後の『-ます』のところが韓国語みたい」と指摘したことがあった。教師が指導するより、学習者同士の方が、教師が見落としがちな指摘をし、聞きやすい自然な発音になることもしばしば見られた。

また、発音に関して学習者に習得の意識化（振り返り作業）も行った。学習者にインタビューを行い、どうやって自己モニター能力を身に付けていったか、どうやって学習ストラテジーを作ったか等を聞いていった。タイ出身の学習者・C さんは初めの頃、「ナ」と「ダ」の混同がよく見られた。そこで、鼻をつまんで両者の違いを意識化させ練習を行った。学期が進むにつれ C さんの「ナ」と「ダ」の発音は自然になっていった。その理由を聞いたところ「発音する前にひと呼吸置くようにしている」というストラテジーや、「単語カードを作成して毎日少しずつ練習している」といった練習方法を聞くことができた。これは母語話者の私には想像もしていなかったことであった。

4. おわりに

私は学習者の成長の過程を日の当たりにし、教師は学習者が学ぶような仕掛けを作り、そのきっかけをポンと出せば、学習者は学んでいくものだと感じた。教師は仕掛け・きっかけを作ることが大切で、そのために念入りな事前の打ち合わせや準備が必要であることも分かった。これは発音だけではなく、文字・表記、文法、作文、口頭表現など全てに当てはまることであろう。

私は 3 学期間「発音 A クラス」の教務補助をした。実習生として履修した分も含め

ると、修士課程の2年間ずっと発音クラスにかかわっていた。教務補助を通して先生、学習者からクラス活動の方法や習得の知識を学んだ。ここで体験したこと、得た知識は私が今後日本語教師として教室に入る際の大きな宝物となるであろう。

(サトウ マサコ・博士後期課程1年)